
Requiem ~ レクイエム K V 5 2 6

東尾さとみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Requiem〜レクイエム KV526

【Nコード】

N4369K

【作者名】

東尾さとみ

【あらすじ】

トットオモ
新劇場こけら落とし公演、モーツァルト『レクイエム』の演奏会当日。

今回初めて舞台監督の重責を担うことになった黒豹のミナガワ・ハジメは、多大なプレッシャーを感じながらも懸命に職務を果たしていた。

芸術家という人種は気難しい。ごく一般的な感性の持ち主であるハジメにはついていけないものがあつたが、そうも言ってはいられない。オーケストラの最終練習、ソリスト合わせ、合唱のオケ合わせ、

ゲネプロと、タイムスケジュールは進み、波乱含みの本番の幕が開く・・・。

<1> オケ練習ソリスト合わせ（前書き）

登場人物が人間ではないのでラブシーンに相当するものはありませんが、恋愛感情らしきものを示唆する表現を若干含みますことをご承知置きください。但し、作者としては、普通に読んでもいっこうに差し障りが無いという認識であります・・・。

<1> オケ練習／ソリスト合わせ

9:00AM～12:00AM【オケ練習】

「今のでOKです。それでは次、『Sanctus』行きます」
タカトウ・トモノリはタクトを構える。

金色のたてがみがふわりと翻って背中に流れた。振り下ろされた
タクトに導かれてオーケストラは歌い出す。荘重に、そして敬虔に、
それでいて適度な軽さを湛えながら。

（やっぱりこのテンポで正解だった）

コンマスのノナカ・ミヤオは、気持ち良さにゴロゴロと喉を鳴ら
したくなるのをぐつとこらえて目を細めた。高揚感に弓使いもま
す滑らかになる。

（いい演奏会になるぞ！）

それはノナカだけではなく、オケのメンバー全員の確信するこ
ろだった。

今日はいよいよ新ホール《ドウオモ》のこけら落とし公演、モツ
レク——モーツァルト作曲「レクイエム」——の本番である。

オーケストラの練習は午前中で終了。午後からはソリスト合わせ、
続いて合唱団が加わってのオケ合わせのあと、休憩を挟んでゲネプ

口——総稽古——となる。

（ソリスト合わせが心配の種だけど。あちらさんのプロとしての見
識に期待するしかないかな）

三日前の練習でタカトウと真っ向から対立した人気ソプラノ歌手の顔を思い浮かべ、ノナカは眉を曇らせた。ステージ下に目立たないように立っている猫背の黒豹をチラリと見やる。

（ミナガワ君。万が一の時にはタカトウ先生のフォロー、よろしく）
苦労性のコンサート・マスターは心の中でそつと手を合わせた。

（指揮者にライオンが多いってのは当たり前なのかな）

舞台監督のミナガワ・ハジメは、そこが定位置のステージ下（指揮者席のすぐ真下）でタカトウに視線を当てながらそんなことを考えていた。

オーケストラの総意に反する横暴さ、と糾弾されかねない批判の嵐が吹き荒れたのが、つい一週間前。しかし、頑固と横暴は威厳と統率力とに評価し直され、昨日までの敵であった？生意気な若造”は、今日の友どころか、？若き英雄”として絶大なる支持を受けてオーケストラの頂点に君臨している。百獣の王たる証しの光栄と尊厳とをその身に照り輝かせて。

容姿も若さも、あるいは性格の良し悪しでさえも問題にはならな
いのだった。問われるのは才能のみ。

（極論、人柄よりもまずは才能ってこと？特殊な世界だよなあ）

音楽芸術に携わる人々を間近に見て、それを裏から支える仕事をするハジメは他人事のように慨嘆するが、まだまだ駆け出しのつもりでいたハジメも、いまや舞台監督の重責を担うまでになっている。今日という日を迎えるまでに、出演者は言うに及ばずだが、裏方にも裏方なりの苦労があつた。この公演を成功させたい。ハジメは心からそう思っている。

責任ある立場としての仕事上のことだけではない。この曲が好きだから。タカトウ・トモノリという指揮者によって命を吹き込まれ

ようとしているこの曲、モーツアルトの『レクイエム』が。
ハジメはＴシャツの上から右肩をそつと押さえた。そこには、まだ生々しい噛み痕が幾つも散らばっている――。

1：00PM～2：00PM【ソリスト合わせ】

事務局長のコンノ・ダイジロウ自らが丁重にお出迎えしたソプラノ歌手のオギノ・マリナは、腫れ物に触るような扱いでホールに案内されて来た。

金色のふさふさした尻尾を持つ美貌のソプラノ歌手は、すらりと背が高く華奢な体付きなのに豊かな声量でたつぷりと歌い上げる、若手の中では人気・実力ともにダントツの『美しき歌姫』である。

しかし胃弱の事務局長にしてみれば、腫れ物どころか時限爆弾並みの厄介物だろう。

（美男美女だから、並べるとすごく絵になるんだけど。とにかく相性が悪すぎ……）

ハジメは黄金のたてがみも美しいマエストロと、つんと尖った鼻のキツネ美女をこっそりと見比べて、最悪のシナリオを予想する。

（――本番目前で、またもや正面对決？）

それはハジメ一人の取り越し苦労ではないようで、眉を八の字にしかめて胃の辺りを手で押さえているヒゲマの事務局長などは今にも倒れそうなほど顔色が悪いし、コンマスで日本猫のノナカ・ミヤ才は、緊張が募ったのか目を細めてクーツと伸びをしたあと、今度はさかんに毛づくろいをしているのだった。

あちらでもこちらでも、グルーミングに余念のない団員たちの姿が見受けられるのも、不穏な空気に毛が逆立つからに違いない。

バックステージ通路から続く階段を案内して、通称《聖歌隊席》へとソリストを誘導しているのは、舞台監督助手のササキである。

テナガザルのササキは身が軽く腰が低いというので、この大役を仰せつかった。表向きは『ソリスト席誘導係』だが、実際には『歌姫苦情係』だったりする。

ステージ正面のパイプオルガン席よりも、やや下方に設えられた三箇所のソリスト・バルコニーは、空中に張り出した形でステージの真上に等間隔に並んでいる。

正面バルコニーにソリスト四人が揃うと、オーケストラのメンバー達は上を見上げながら拍手で迎えた。ソリストたちは軽く手を振ったり、会釈を返したりして、にこやかに応えている。――
ブリマドンナ・マリナを除いては。

（さあ、始まるぞ）

一部始終を視界に収めながらも見なかったふりで、ハジメはインカムのマイクを通して照明の指示を出す。

「正面バルコニーにシーリングライト当ててみて。ん？弱くていいよ。明るすぎると変だろう」

ライトの円が四人を捉えようとして徐々に直径を拡げていく。オルガン席にも同時にライトが当てられ二つの円の大きさが揃えられた。

だが、？弱く”の指示が曖昧だったようだ。ぽつちやり太ったタヌキのアルト歌手が、目の上に掌をかざして眩しげにしている。

「眩しいみたいだ。光量落として」

そう指示してやると、すぐさま二つの円はぼんやり霞んだ。今度は大丈夫のようだ。

ハジメは天井を振り仰いで「すみませんでした！」と声を掛ける。気さくなタヌキ嬢は「ありがとう！」と返してきた。

そんな一幕があってもオギノ・マリナは楽譜に目を落としたまま

顔も上げなかった。

（この前は無関係なスタッフにまで当り散らして大騒ぎしたのに、今日は人が変わったみたいに大人しいじゃないか）

どうにも嫌な感じがした。——嫌な予感というのは大抵あるものである。

ソリスト合わせが始まって、それはすぐに明らかになった。歌姫は回りくどいやりかたでもって、再びマエストロ・タカトウに喧嘩を売ってきたのだ。

結局のところ彼女の選択肢は二つに一つだ。すなわち、マエストロの指示通りに「歌う」か、降板してしまって「歌わない」か。そして、降板しないと決めたのなら、プロとしては、本番に向けての最大限の努力をして然るべきところだが、彼女は駄々っ子のような反撃に出たのである。すなわち、『私は本当は歌いたくないの！』という言外の抗議として、無難に合わせるだけのまるでやる気の無い歌い方、という方法で……。

（彼女にはプロとしての責任感はないのか？今日のコンサートだって、彼女の歌が聞きたくてチケットを買ったっていうお客さんが大勢いるはずなのに！）

ハジメは心では勿論、相当に憤慨していた。グルル……と喉元までせり上がる唸り声を必死の思いで押さえ込まねばならないほどに、しかし当のマエストロ・タカトウは、眉一つ動かさずに黙々と指揮をしていた。そして声を荒げることもなく、むしろ穏やかに、彼女に語り掛けた。

「オギノさん。いつものきらびやかな美声は要りません。むしろどこまでも透明で清澄な響きが必要です。表現したいのは『敬虔な祈り』ですから」

プリマドンナ・マリナは、だが、これにも完全無視で答えた。

（信じられない……）

ハジメの心の呟きは、その場にいる者全員の心の声だったろう。事態は全く絶望的だった。

先にキれるのはマエストロか、それとも歌姫か……。一触即発の緊張感がみなぎる中で、誰もがポーカー・フェイスを顔に貼り付けて、表面上は何事もないように振る舞っていた。薄氷を踏む思いで神経を擦り減らしながら。

こうしてソリスト合わせは粛々と進み、予定していた時間よりも、ずっと早く終了した。

<2> 休憩時間

【 休憩時間 】

「失礼します。舞台監督のミナガワです」

ノックを軽く三回。それから名前を告げて、返事がなくてもそのまま入る。マエストロ・タカトウの控え室への入室に際してフリー・パスなのはハジメただ一人だ。

『お籠もり中』のタカトウは、ソファーに浅く腰掛けて腕組みをし、目を閉じていた。

ハジメは出直すべきかと一瞬迷ったが、マエストロは眠ってはいなかった。大儀そうに瞼が持ち上がり、その奥から疲れた眼差しが現れる。

「こっちへ来い。話が遠い」

少しハスキーな弱々しい声に、ハジメは眉をひそめた。

（相当こたえてる？）

心配が顔に出ないように気をつけながら、事務的な態度と表情を崩さずにタカトウの傍らに歩み寄る。

「ソリスト合わせが早く終わったので、先生さえよろしければゲネの開始を繰り上げるように変更指示を出しますが、いかがでしょうか」

「そうだな……………」

それきり黙ってしまったタカトウの返事を待つて、ハジメは静かに立っていた。

若い舞台監督は、いつでも臆することなく真っ直ぐに憧れの眼差しを向け、マエストロは目を閉じてそれを受け流す。このバランスが二人の関係を安定させていた。

傍目には一方通行に見える感情のベクトルは、だが、目には見え

ない複雑な軌跡を描いて二人の間を巡っているのだった。

（マエストロ——巨匠——。芸術家。線の向こう側の《英雄》。俺とは無関係な、別の世界の住人……）

何も始まらない安心感は、どこにも繋がらない虚無感とワンセットでハジメのポケットの中に安らかに収まっている。「世界が違うのだ」と、線を引くことによって安全圏に身を置くのは無意識のことだったが、狩りをする種族の習性としての用心深さからだったかもしれない。

闘争本能、好奇心、自制、葛藤、抑圧、プライド。何を押さえ、何を解放したら相応しいのかを決めるのは誰だろう。何かを実現するために必要なもの、不必要なものはあるのだろうか。

答えは昼の月のように中天に霞んでいる。

（誰にも何も言えやしない。言うべきでもない）

ハジメは思う。一般常識から言えば考えられないような態度も言動も、芸術の前には瑣末なことなのだ。おそらくは。

「だいたい、歌いたくないなら歌いたくないで、事前にキャンセルしてくるべきでしょ？本番三日前だろうと関係ありませんよ。モツレクですからね。代役を探すことは不可能じゃないでしょうよ」

「甘いなササキ君。新劇場のこけら落とし公演だよ。ただ『歌えます』ってだけじゃあ、お断り。オギノ・マリナくらいのネームバリユーと実力が無くてはな」

「……そんなの分かってますよ。ただ言ってみただけなんですってば」

舞台照明の根城であるところの調光室では、愚痴りに来たササキを照明チーフの老ビーバー、ミスタニが相手をしてやっていた。

ミスタニは歌劇場の照明チーフを後進に譲り、新米ばかりを引き連れて新劇場に移ってきた。しごき甲斐のある若手をこれから仕込んでいくのを楽しみにしている大ベテランだ。

一体どのくらいの年齢なのか誰も知らないという伝説の御大は、厳しい親方でありつつも懐の広い相談相手であり、悩める若者達に良き指針を与える先達者である。

「まあ、見ててごらん。キツネ美女はなかなかクセモノだ。本番では誰もがアツと言わされるぞ」

「……言わされたくないです」
「そうだろうね」

ミスタニは苦笑しながらヒゲをはじいた。

「ササキ君にはまだその余裕が無い。そこが舞監と舞監助手の差だね」

「そりゃあ、ミナガワさんは俺なんかよりずっと苦労人ですからね」「いやいや。ミナガワ君も《ドウオモ》に来るまではササキ君と五十歩百歩だったよ。本当に、ついこの間まではね」

ササキはうるんげな眼差しでミスタニを見やった。伝説の御大の言う『ついこの間』が、新人君には十年とか二十年とかいう単位に思われたので。それは当然のこと、その通りであった。御大はササキの視線を受け止めて、実に愉快そうに笑った。それは何の遠慮もない心底楽しげな笑いで、ササキに小さな溜め息をつかせたのだった。

タカトウは舞台監督の肩口に噛み付いた。

退化した牙と言うものの、それなりのダメージはある。ハジメの口から押し殺した苦鳴が上がると、若いライオンはハッと我に返

った気配だった。次の瞬間、力を失い、カクリと膝が折れて前のめりに倒れ掛かる。ハジメはマエストロをあやうく抱き留めた。傷から滲み出した血がハジメのＴシャツの肩を薄っすらと染める。瞬間的にピリツと痛みが走ったが構ってはいられない。

決して軽くは無い身体を半ば引き摺るようにしてソファーまで移動した。頭を低くして寝かせてやって、襟元を緩める。

マエストロは茫漠とした眼差しを天井に向けているばかりだ。意識は失っていないから大丈夫だろうと判断する。脈は——速い。

ハジメは冷蔵庫をあけてミネラル・ウォーターのボトルを取り出した。口を切って、マエストロの傍らに戻る。

「タカトウ先生、水です。少し飲みますか？」

手に手を添えてボトルを持たせてやり、タカトウの目に少しずつ焦点が戻ってくるのを見守った。

「……………」

血の気の無い口元が何か言葉を紡いでいる。

「何ですか？」

ハジメはマエストロの口元に耳を近付けた。

「……………言葉が通じない相手には……………心も通じない道理だな」

聞こえるか聞こえないかの呟き。

戸惑うハジメの首にタカトウの腕が巻きついてきた。体を起したのだと察して背中を支えてやる。

凭れ掛かるようにして上体を起したタカトウは、やがて長い溜め息をついた。金のたてがみがハジメの肩口に伏せられる。子供が母親に甘えるような仕草だ。

「僕は、たぶんどこかでやり方を間違えたんだ。……………きっと何か別な方法があつたはずなのに」

独り言のようだが、どこか甘えたような響きがあつた。タカトウはそのままの姿勢で、ずっと動かない。

ハジメは目を閉じて肩の力を抜いた。ソファーの背に体重を預け

て、母ライオンになったつもりでマエストロを抱き留める。
やがて静かな規則正しい寝息が聞こえてきた。

<3> オケ合わせ／ゲネプロ

2：30PM～4：30PM【合唱＋ソリストのオケ合わせ】

合唱のオケ合わせは定刻通りということになった。

入場に時間の掛かる大人数の合唱団は、十五分前には舞台袖に整列していた。

これから入場リハーサルを兼ねた入場でタイムを計り、合唱団にはステージ上のコーラスベンチにて待機して頂く。その間にベンチの不具合等のチェックを済ませ、対処。

定刻三分前になったら、それぞれの係がソリストとマエストロを『お迎え』に走る。

オケは自由集合なので、個人練習のために早々にステージ上に陣取っている者あり、袖で調整中の者ありと様々だ。音出しギリギリの時間に駆け込んでくるツワモノもいるが、遅刻は勿論ありえない。ハジメは調光室に近い下手側の配電盤の前にいた。ホール付きのアナウンス係とアナウンスの最終チェックをしながら、モニターで合唱団の入場を見守る。タイムキーパーは舞監助手のササキである。コーラス入場完了しました。七分三十秒です

回線を開けっ放しにしてあるインカムのイヤホンからササキの報告が届く。

「了解。歌劇場のタイムと変わらないな。足場は？」

問題無しです。今から戻れますか？

「すぐ行く」

モニター映像でステージ上の様子をざっと確認する。

上手よりの辺り、男声と女声が一行ごとに交じり合っているのはベンチに余裕が無いからだろうか。見た目も良くないし、第一、歌いにくいだろう。あそこはチェックしないと、と思いながらハジメ

は頭の中でもう算段を始めている。

「いったんステージに戻るから。後はよろしく」

音響係のチーフに言い置いてステージに向かう。腕時計の時刻は十四時二十分を少し回ったところ。

ミナガワ君、聞いてるかね？」

「聞いてますよ。ミズタニさん、何かありましたか？」

ミズタニ御大は、たとえどんな一大事が起きたとしても平然とした声音なので油断がならない。悪い知らせでなければいいのだが。

オルガニストのお嬢ちゃんがピンスポ入場を勘弁してくれと言ってきてる。オケと一緒に入場したいそうだ

「ソリスト待遇で招いた奏者なのに、スポットライト無しで？　それで、オケと一緒に？　そういうわけにはいかないでしょう。挨拶もしたくないってことでしょうか？」

演奏前も演奏後も、客席からの拍手を受けて挨拶——お辞儀をするのは指揮者とソリストとコンサート・マスターだけである。オケの代表としてはコンマスが、合唱の代表としては合唱指揮者が代わって拍手を受け、挨拶をする。

ソリストとして挨拶をしたくないとかいうことじゃなくて、ピンスポが嫌なんじゃないかな。あれは、《アマゾンの女王》に気兼ねしていると見たね

インカム越しに、ざわざわっと複数の声が重なってハジメの耳に届く。「アマゾン」と、思わず繰り返し返す者、プツと吹き出す者。……

……いったい何人がこの揶揄に耳をそばだてていたものやら。

「ミズタニさん、誰が聞いているか分からないので言動には御注意を」それは済まなかったね

少しも済まなかったとは思っていない口調で返されて、ハジメは苦笑した。

「オルガニストは、確かもう入場してますよね？」

たった今、誘導係が伝令に走って来たんだよ

「その件は保留にしておいて下さい。そうだなあ、入場・挨拶の時

にシーリングライトを明るめに当てるのはどうでしょうか？ それならピンスポットほどの仰々しさは無いし」

それでいいんじゃないかな

「それじゃ、そのセンで説得してみます」

演奏者には憂いなく、できれば気分良く本番を迎えて欲しい。だから希望は出来るだけ叶えてあげたいが、譲れない線もある。そのあたりの兼ね合いが難しい。納得してもらえるといいのだが。

ハジメが下手側の袖口からステージに入って行くと、合唱指揮のイワブチ氏が合唱団員に指示を出しているところだった。

「端っこの人は落ちない程度にギリギリに座ってみて。足場の悪い人がいたら手を上げて教えてね。うん。これでバランスが良くなった。でしょ、ミナガワ君」

イワブチ氏は、いつものようにニコニコとハジメに話し掛けた。

この人が怒っているところを見たことがない。

「はい、ありがとうございます。申し訳ありません。うちの助手が気が利かなくて……」

「立派にやってるでしょ。『歌姫苦情係』」

「……恐れ入ります」

「君は『マエストロ苦情係』から『腹心の部下』に昇格したって？」

「とんでもない！『苦情係』のままですよ」

「御謙遜。タカトウ先生の控え室にフリーパスだって聞いているよ」

そんなことまで、と少し慌てるハジメである。

「……イワブチ先生、情報通ですね」

すると、合唱指揮者は得意気に胸をそらした。

「ミズタニ御大とは飲み友達だね」

「なるほど」

そんな会話を交わしながらも、ハジメの目はオケのメンバーが揃っているかどうかを確認している。大丈夫。ちゃんと揃っている。コンマスのノナカが立ち上がってチューニングを始めた。――
時間は。三分前になるところ。

「それじゃ、『苦情係』はマエストロをお迎えに行って参りますので」

「いつてらっしゃい」

ツキノワグマの合唱指揮者は、首の月の模様の辺りをコリコリと掻きながら微笑んだ。

タカトウは指揮台に立つなり、すぐにタクトを構えた。

合唱のオケ合わせは、オケとソリストが仕上がっているという前提のもとで、合唱パート中心に行われる。

「ソリストと合唱の合わせを先にやってしまいます。それでは一曲目『INTROITUS』、前奏から」

七小節の前奏のあと、バス・パートの歌い出しがホールに響く。そこにテナーが被さり、アルトが追い掛け、最後にソプラノ・パートが加わって四声部のコーラスになっていく。二十一小節からはソプラノのソロ。

さて、プリマドンナ・アマゾネスは、今度はどう出るのか――
――。

「それでは十分間の休憩です！」

オケと合唱団の拍手に送られてソリストたちが退場して行つたあと、ハジメはステージ下から声を張り上げて休憩を告げた。

ソリストを交えての合わせ練習は拍子抜けするくらいあっさりと、何も起こらずに終了した。

（？威嚇”は十分に済んだ、ということなのかな？）

……やれやれだ。休憩のあとは合唱とオケだけの合わせなので、トラブルの心配は無いだろう。

全曲に渡って極端に遅いテンポを指示してきたマエストロに、オケ同様、合唱団でもそれなりの混乱はあったと聞いている。しかしイワブチの指導の下、すぐにまとまったという話だ。

（あとはゲネプロを残すのみ、か）

マエストロと打ち合わせをしているイワブチ氏を頼もしく眺めるハジメである。

（あ。オルガニストの御機嫌伺いに行かなくちゃだった）

ゲネプロ開始までに済ませて置くことのリストがハジメの頭の中で慌しく捲られていった。

6：00PM～6：45PM【ゲネプロ（総稽古）】

指揮者によってはゲネプロを本番通りに丸々やることもあるが、マエストロ・タカトウのゲネは全体を流す感じで終えてしまう。その分オケ合わせに時間をとるタイプなので、時間配分も、そのよう

に考慮されている。

各曲の出だしだけをさらって行きながらゲネプロは順調に進み、最後にカーテンコールの打ち合わせが残った。

本公演の舞台である歌劇場では、ソリストが一旦退場してからコールに応えて再入場するのが慣例だが、『ドウオモ』ではどうするか。バルコニーへの再入場か、それともステージまで降りて来てコールに応えてもらうか。

ソリストの意見を聞きたいところだったが、誰もがアマゾンの女王を意識して口火が切れない。なにしろ今日、彼女はまだ一言も口を利いていないのである。

ここは自分が討ち死に覚悟でお伺いを立てるべきかと、ハジメが腹を括った時。

「私はステージに降りたいわ」

オギノ・マリナが微笑を浮かべて提案をした。

……………これは、本番を前にしての、プリマドンナの側からの『譲歩』と見るべきだろうか？

調光室でも、この肩すかしに、ミズタニとササキが思わずといった調子で顔を見合わせていた。

「不気味ですよねえ。絶対に何かありますよ」

「だから言ってるじゃないか。本番ではアッと言わされるって」

「うわあ。それってミズタニさんの『予言』だったんですか？やだなあ。冗談かと思って聞いてたのに。ぶるぶる……………」

尻尾をお尻の下に巻き込んで全身を震わせるササキに、ミズタニは何でもない口調で告げた。

「お手並み拝見、だな」

< 4 > 本番

8:00PM開場・8:30PM開演

【新劇場 《ドウオモ》 こけら落とし公演 モーツァルト『レクイエム』本番】

開場と同時に劇場ロビーではお祝いのシャンパンが振る舞われていた。ずらりとフラワー・スタンドが並べられたロビーを、着飾った観客達が行き交う。

「華やかなものですね」

指揮者控え室の窓からロビーを見下ろして、ハジメは感嘆の声を漏らした。壮麗な装飾が施されたロビーは、溢れるような花で飾られ、ますます華やかさを増している。

「これから『レクイエム（鎮魂曲）』を聴こうっていうのに、シャンパンはないだろう」

眉をしかめて呟くタカトウに、ハジメは肩を竦めてささやかな同意を示した。

演前のアナウンスが流れ、寺院の鐘の音を模した一ベルが鳴った。ロビーから客席へと移動する人の波がホール内の空気を攪拌する。衣擦れ、ざわめき、靴音、そして期待と興奮の入り混じった空気を。

『《ドウオモ》こけら落とし公演』の幕が開こうとしていた。2ベルが鳴って、客電がゆっくりと落ちる。合唱団入場、続いて

オーケストラ入場。コンマス入場、オルガニスト、ソリスト入場。拍手のさざ波が次々とホールに拡がる。

バルコニー席とオルガン席にライトが当たると、客席の視線は上方へと引き寄せられた。正面バルコニーには盛装したソリスト四人が居並び、拍手に応えて典雅な仕草でお辞儀をした。

左右のバルコニーには白を基調とした花々が飾り付けられている。オルガン席の足元にも籠盛りの花が置かれて、ホールの中は清しい花の香りに満ちていた。

カトリック教会の礼拝堂を思わせる聖歌隊席のアイディアは、視覚的には申し分なかった。しかし音響効果はどうだろうか。ソリスト席の設計も含めて、新しいホールの《箱》としての実力が問われる演奏会なのだった。

ひととき大きな拍手に迎えられて、指揮者入場。タカトウは泰然とした足取りで指揮台に向かう。

若きマエストロは客席に一礼してオーケストラと向き合う。燕尾服の裾が動きにつれて優雅に翻る。ホールに水を打ったような静けさが満ちた。

タカトウは黙祷のような姿勢から静かにその面を上げた。そしてオーケストラと合唱を見渡す。その瞳には信頼の色がある。深く息を吸い、ゆっくりと吐き出したタイミングでタクトを振り下ろす。

ハジメは舞台下手側の袖口で、ミスタニ御大は調光室で、ササキはソリスト席の扉の後ろで、その瞬間を、じりじりと待っていた。一曲目のソプラノ・ソロ。これをオギノ・マリナがどう歌うのか

と。

前奏、コーラスの重なり、そして二十一小節目。

《神よ、シオンにて讃美を捧げ、エルサレムにて御前に誓いを果たしましょう》

「な、なんで……」と、ハジメは呟いた。

「ふむ」と、御大は頷いた。

「《予言》が当たった……」とササキは脱力した。

舞台では何事もなかったかのように、ソロを受けて合唱が続いていた。まるで始めから何の問題も無く、元々このようであったのだとでもいうように。

オギノ・マリナのソロはタカトウの指示そのままの具現だった。

天上から柔らかく降りてくる天使の歌声。光のようなきらめき。

羽毛のような手触り。プリマドンナ・マリナは *spiritoso* (精神的に) な *so tto voce* (弱く静かに) で歌っていた。
「あんなに逆らったクセに……」

わけが分からない、とハジメは思った。なんだか納得がいかない。さんざん引つ掻き回しておいて、本番には涼しい顔で完璧に要求に応えるなんて……いや、ここは喜ぶべきところだ。コンサート
の成功こそが第一義。終わりに良ければすべて良し。

舞台上の演奏者達も、バックステージの裏方達も、誰もが同じ思いだっただろう。そしてもちろんマエストロ・タカトウも。

だが演奏が進み、中盤に差し掛かった頃、思わぬことが起こったのだった。

ソロの『Recordare』のあと、がらりと曲想の変わる、合唱による『Confutatis』。

『Recordare』は、天国と十字架を想いながら、執り成して下さるキリスト・イエスに赦しを願う祈り。『Confutatis』は、燃えるゲヘナの、父なる神の怒りと裁きを想いながらの祈り。軽やかなソロと、重々しい合唱。二つの曲には、はっきりとした対比がある。

タカトウは歌い終えた四人のソリストがバルコニーの後ろに引込んだのを目で確認して、合唱団にコーラスベンチからの起立を促した。

緊張の面持ちを眺め渡し、笑顔でもって笑顔を引き出す。緊張がほぐれたことを確認して、コンマスのノナカとアイコンタクトを取る。目と目でうなずきあつて、タクトを構えた。すつ、と呼吸を詰めて振り下ろす。

『Confutatis』は、Andanteの指示を今回はAdagioほどにもゆつくりと振っている。演奏者諸氏には苦行を強いることとなったが、良い結果を導き出せた手応えを感じている。オーケストラは緩みも無くリズムを刻んで良く支え、合唱は独特のうねるようなテンポを緩急自在に操る。力強い男声合唱の合間に、遠い天の高みから微かに聞こえて来るかのような女声合唱が入り、やがて四声部の静かな祈りに集約していく―――はずだった。

その流れに、いきなり予想外の賓客が加わった。アマゾンの女王が、何の前触れもなく降臨したのだった。その荒ぶる心根を天使の羽でくるみ、こよなく麗しい、優しい美声を聞かせて。

《私を呼んで下さい。祝福された者たちとともに》

ここで聞こえてくるはずのないソプラノ・ソロを耳にした瞬間、ハジメは言葉もなく立ち尽くした。

身体ばかりか、魂までもが凍りつく心地だった。

（やった。やってくれた。こんな形で！）

（……《予言》は、こっちだったんですね、御大）

（いやはや。まったくたいした度胸の持ち主だよ。とんだ女王様だ）
バック・ステージでは誰もがショックを隠しきれずに顔色を変えたが、ステージの上の出演者達は、そういうわけにはいかない。いつそ天晴れなアマゾンの女王の『復讐』に、乗せられるわけにはいかないのだった。

音楽は止められない。やり直しはきかないのだ。あるはずのないソロが合唱に混じったくらいのもので『Confutatis』を、いや、《レクイエム》を台無しには出来ない。

タカトウは、自分のタクトにぴったりと付いてくるプリマドンナをぴりぴりと意識しながら、全神経を集中して平常心を保ち続けようとした。どうか誰も動揺しないでくれ！という焼け付くような心の叫びを渾身の力で抑え、捺じ伏せて。

だが、さすがは皆プロなのだった。オーケストラもコーラスも、少しも乱れなかった。苦悶の祈りに応える天上からの光の梯子。踊る光のきらめきと、力強い舵取りのリズムが見事な対比で呼応しながら繰り返されていく。練習で作り上げたそのままの再現を、不測の事態に揺るがされることなくやってのけたのだ。

——このイレギュラーな『Confutatis』の演奏を、客席は「こけら落とし」の新演出と解したに違いない。

「素晴らしい演奏会でしたわ。マエストロ・タカトウ」

「あなたのおかげですよ。プリマドンナ・マリナ」

十回を優に越えるカーテンコールに応え、ようやく舞台袖に引込んだ出演者たちは、そこで互いに握手や抱擁を交わしていた。

——マエストロとプリマドンナも。

「皆様の御信賴が篤くていらっしゃるのね。意外だったわ」

「あなたも練習無しでよくあれだけお歌いになりました。大変ご立派です」

「ありがとう。また一緒にお仕事できると嬉しいわ」

「こちらこそ」

少し離れた場所から二人の様子を眺めていたハジメは、この皮肉の応酬に背すじを寒くしていた。

（今日のような経験は二度と御免だ……）

だが、そうはいかないだろうということも、容易に想像がついてしまふのだった。

「お二人とも、握手をお願いしますー！」

何も知らない記者やカメラマンが二人を取り囲んでリクエストする。

マエストロ・タカトウは笑顔でプリマドンナと握手を交わして、何枚も写真を撮られていた。

「指揮者のタカトウ・トモノリはその若さに似合わぬ老成した（良い意味で）モツレクを聞かせてくれた。オーソドックスな版を選び、奇をてらわぬ解釈で、いかにもモーツァルトらしいモーツァルトを丁寧に表現した。昨今は、どんな曲でも速いテンポで聞かされるこ

とが多いのだが、タカトウは敢えてこれを避け……（中略）……よく計算された緻密な正確さと、清らかな明るさと軽さとが見事に溶け合うバランスの良さ。この、あまりにも有名な宗教曲が、合唱曲の白眉でもあることを改めて思い起こさせる名演である。最後になったが、若きマエストロの解釈に存分に応えた歌姫オギノ・マリナに、最大の賛辞を贈りたい。」

（『月刊クラシック・レビュー』掲載 音楽評論家 ウラベ・ユキヒロ）

（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4369k/>

Requiem ~ レクイエム KV526

2011年10月4日21時04分発行